

野に臥して――

燦爛と陽はかがやけり草原に男三人蟻みつめをり
下をむき草莖つたふ蟻みればわきてぞくらし淡き哀愁
蜘蛛の子が一匹芝の間行く臥してみつむる原の午後かな
うつぶせに寝そべりてあれば脊はいとうぬくもりてこしうららかな陽や
そと摘みし三味線草の三角の實にもわきくる幼な日の夢
耳もとで三味線草をひいてみるなべてなづかし幼な日のこと
うれしさもかなしさも皆とびされるこころこそすれ春野に臥すれば
流れゆく雲とならまし若人は今日も仰ぎて泪ぐむかな

習作二十首

春の歌

二、二、甲二 白

春よ老ゆな若草の香にゆめのごと酔ふ若人のためにな老ひそ
今日はしも物悲しさのひしびしと身に泌む日なりわれ彷徨はむ
夕ぐもの三ひら二ひら照りはわて静かに春の日は暮るるかな
夕ばらの雲をうつして悠々と白川の水は流れながるる

啼

ゆくりなく人の戀しきたへがたし静かに春の陽の沈むころ
石楠花うすくれなひに匂ふ夕きぬいごと春雨のふる
春雨のふるや夕暮のんびりと湯漕につかり歌などを思ふ
戀猫が泣いじやくりつつ過ぎゆきぬなま暖かき春の夜かなし

さびごころ

雨あがりあしだ引ずり杖ふりて通町をとほる白き夕暮
われと我が生活を知らず詩を知らず悲しからずやかくて生くとは
そのかみのペンガルの塔の心地すれすくと延べる杉葉の若芽
ただすみてすぎなの若芽つなぎをり氣まぐれ心すこしはかなみ
色黒き馬子があはれな馬車馬をなぐりつつあるがかなしかりけり
亂暴な馬子になぐられ黒馬のおちけさしたる可愛ゆき瞳
紅つつじ燃ゆるをつみて云へる人「なべて赤きは若人のいろ」
何故の命ならむと吐息してあしもとの石蹴れるひとかな

わかれ

白薔薇ほるとひとひら崩れおつ別るるこの夜なにの徴ぞ
おぼろにも月さへなみだぐみ居れる長きわかれをおくる今宵に
さやうならと涙ぐみ云へる人の眼もと思ひうかべつブリツヂを登る

別れ來て見送り人のさまなどを話しあへるも悲しからずや